

NIHONJIN NO WASUREMONO
日本人の忘れもの
 第2部 忘れもの 31
 著者 華 森 清 範 清水 貴 真

火の文化



熊倉 功 夫
 静岡文化芸術大学長

歌の詞ではないけれど、忘れられない、忘れたくない思い出が、ふりかえってみると人生の中にたくさん詰まっている。そんな思い出の一つが、たき火である。

子供のころ、年中、落葉やごみを庭で燃やしていた。わらで作られた俵など燃やせば、その残り火の中で焼き芋もした。火が勢いよく燃えると面白いからどんどん火を大きくすると、大人から危ないといわれて叱られた。火が消えたあとも、何度も見にいって本当に消えたか確かめさせられた。しらすしらすのうちに火の教育を受けてきた。

人類にとって火は最も大切な文化の獲得

今、家の内外から火がなくなってしまう。火は危ないからなるべく生活の中から追い出すことが近代化であった

偉大な火に対する信仰は洋の東西を問わず遍在する。同じ火を使うことで同朋であると確信できた。

た。おかげでたき火の楽しさも火鉢で炭をおこす面白さも、遠い思い出になってしまった。火遊びといっても、怖さと面白さが背中合わせになっている言葉の感覚は、今の子供たちには伝えられない。やがて火遊びという言葉が死語になるだろう。

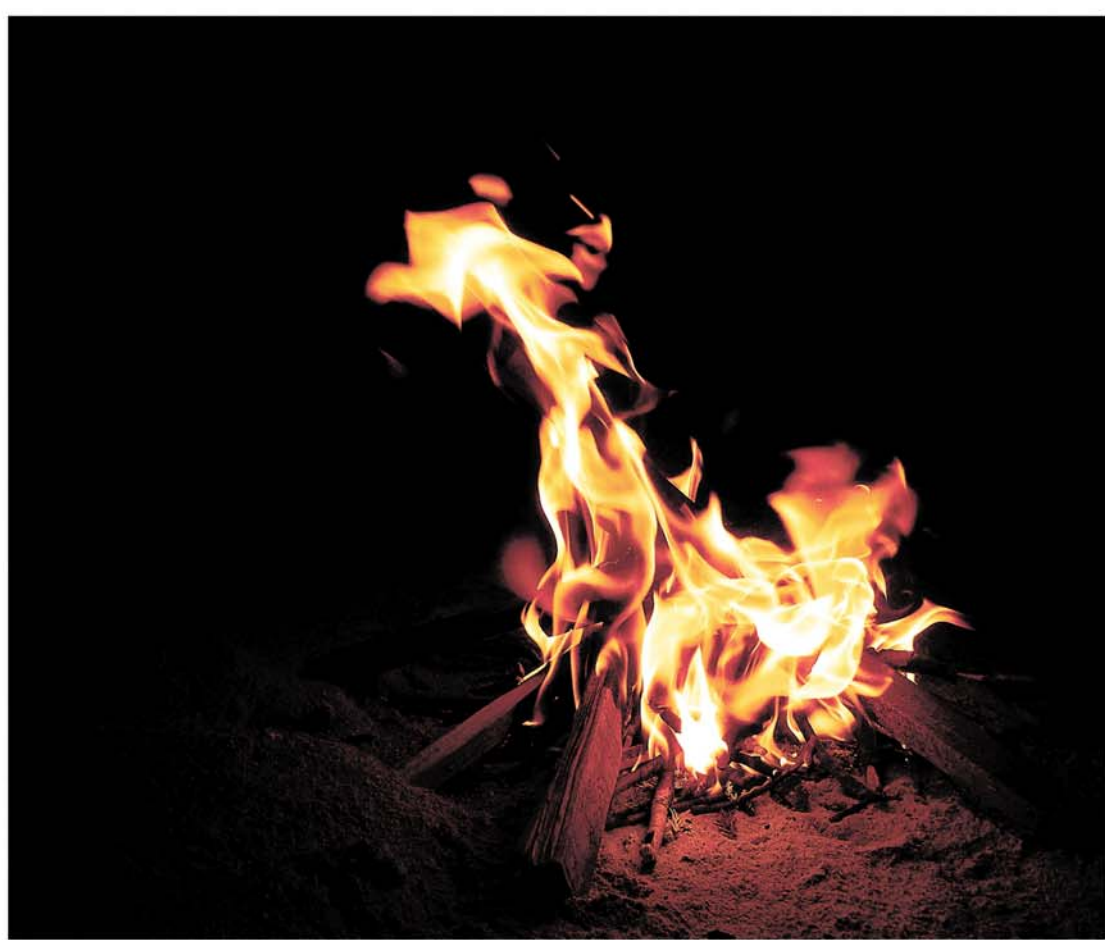


味が半ばある。

こんな大事な、偉大な文化を危険だからといって捨ててしまつてよいものか。

今、かろうじて火の文化を伝えていけるのは茶の湯である。茶の湯には、炭煎点前というのがある。まず炭をおこし、下火をつくり、これに大小さまざまな炭を置きそえて、タイミングよく湯がわき、釜から松風を連想させるようなかすかにわきあがる音が聞こえてくるように、段取りをする点前である。しかもそれを客の見ている前で

日本人が忘れてきている火の文化が茶の湯に息づいているのを見てホッとするのは私だけではないと思ふ。



怖さと面白さが背中合わせになっている「火遊び」という言葉は、やがて死語になるだろう。

火の周りに人が集まり心をつなげる。おそろく火が使われはじめたころは、発火させることがとても大変だった。だから燃えている火を消さずに守らねばならない。それは不在がちな男の仕事ではなく、炉の周りにいて仕事をやる女の役目であったろう。女性と火の周りに人が集まりそれが家族となつた。今でも常夜燈のように絶やさぬ火がある。聖火が消えぬようにリレーされるのも、太古の昔、集団が移動するとき、火種を大切に持って歩いた名残ではあるまいか。

偉大な火に対する信仰は洋の東西を問わず遍在する。拜火教の火も護摩の火も、鞍馬の火祭も、みな火の神聖なることを示している。同じ火を使うことでわれわれは同朋であると確信できたのである。同じ釜の飯を食う、というの、同じ火で煮炊きすることに意



炭点前 (写真提供: 表千家)

●くまくら いさお
 1943年、東京都生まれ。東京教育大学文学部卒業、同大学院修了。京都大学文学部研究員、筑波大教授を経て現在、静岡文化芸術大学長を務める。日本文化史、茶道史、華道研究に造詣が深い。主な著書に「寛永文化の研究―茶の湯の歴史」など。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、林原美術館元館長。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千原の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

きょうの季節せ (一月)

寒雀 遊べばこころ 遊びげり

宮部 守 七 翁



20日が大雪、きょうは寒の土用最中の満月である。

寒気のために全身の羽毛をふくらませた雀のことを「ふくら雀」という季節もあるが、これはじつと枝などに止まっている光景である。

掲句は、鳴き交わし、飛び交い、雀の姿しなう、片時もじつとしていない姿を見ていると、おのずから心の弾みを覚えるのである。

(文・岩城久治)

「きょうの心伝」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか？ 暮らの中で忘れてはならないと思う日本人の心の系譜や、伝えたい京都に残る心遣いなどをお寄せ下さい。京都新聞社で選考、公開する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内)、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝」係まで。 E-mail: yasunonohito@kyoto-np.co.jp Fack: 075-262-1220

●江見可菜恵
 会社員/京都市中京区/25歳
 消えた商店街
 実家のある地方都市へ帰ると、郊外型ショッピングモールへよく買い物に出かける。車に乗って幹線道路を走る時、その道沿いには大型複合施設が立ち並ぶ。

私が子どもの時は、駅の近くに軒を連ねた商店街に活気があり、電車に乗って2つ、3つ先の栄えていた町へと友だちとよく買い物に出かけたものだ。それぞれの店には小さいながらも特徴があり、そして言葉では言い表せない温かみがあった。しかしその商店街は今も郊外のショッピングセンターに客足を奪われ通りには人影が少ない。

私の郷里に限らず、他の地方都市でも同じように商店街がシャッター街化しているのと同じ。そのお店がか手に入らない物、思い出の詰まった店、あの時食べた味が今でも懐かしい。今の子どもたちの思い出には、一体どんな店の姿が残るのだろうか。幹線道路の上から大手チェーン店の看板が掲げられた四角い建物を眺めながら、どこか寒々しい思いがした。

未来を、もう一度。

あなたが笑っている。木の葉が風に揺れている。町には必要なぶんだけ明かりがとまり、きのうより、こころ豊かな今日がある。その全部が全部つながって、地球がゆっくり回っている。人が、時代が、地球が求めているテクノロジー。それが富士通のめざすICTです。



FUJITSU

shaping tomorrow with you

夢をかたちに